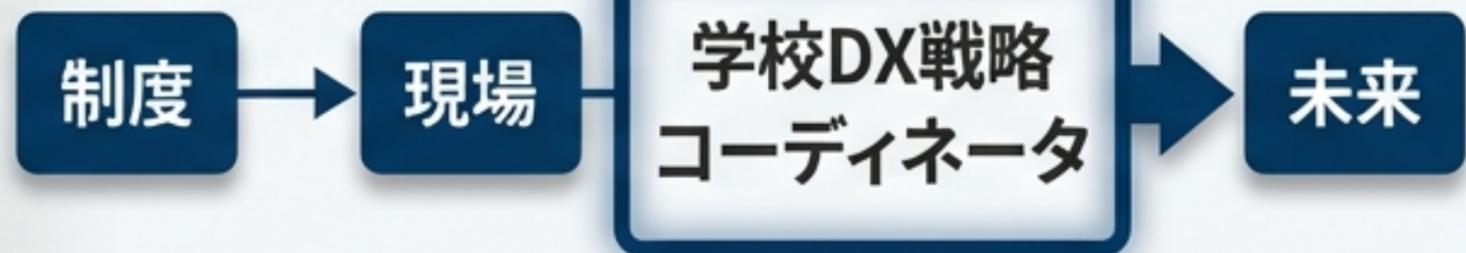
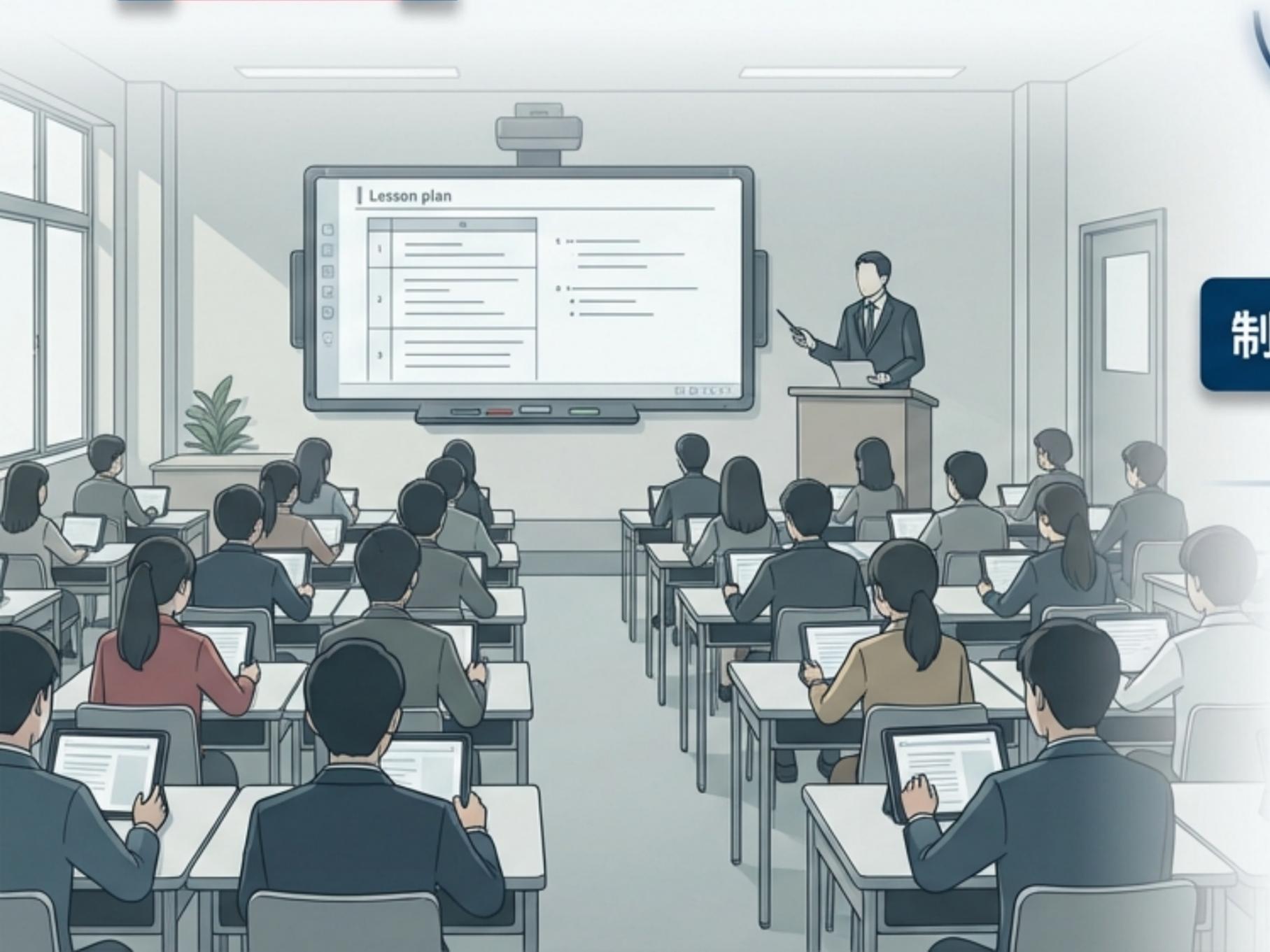




# ICTを入れても学校は変わらない

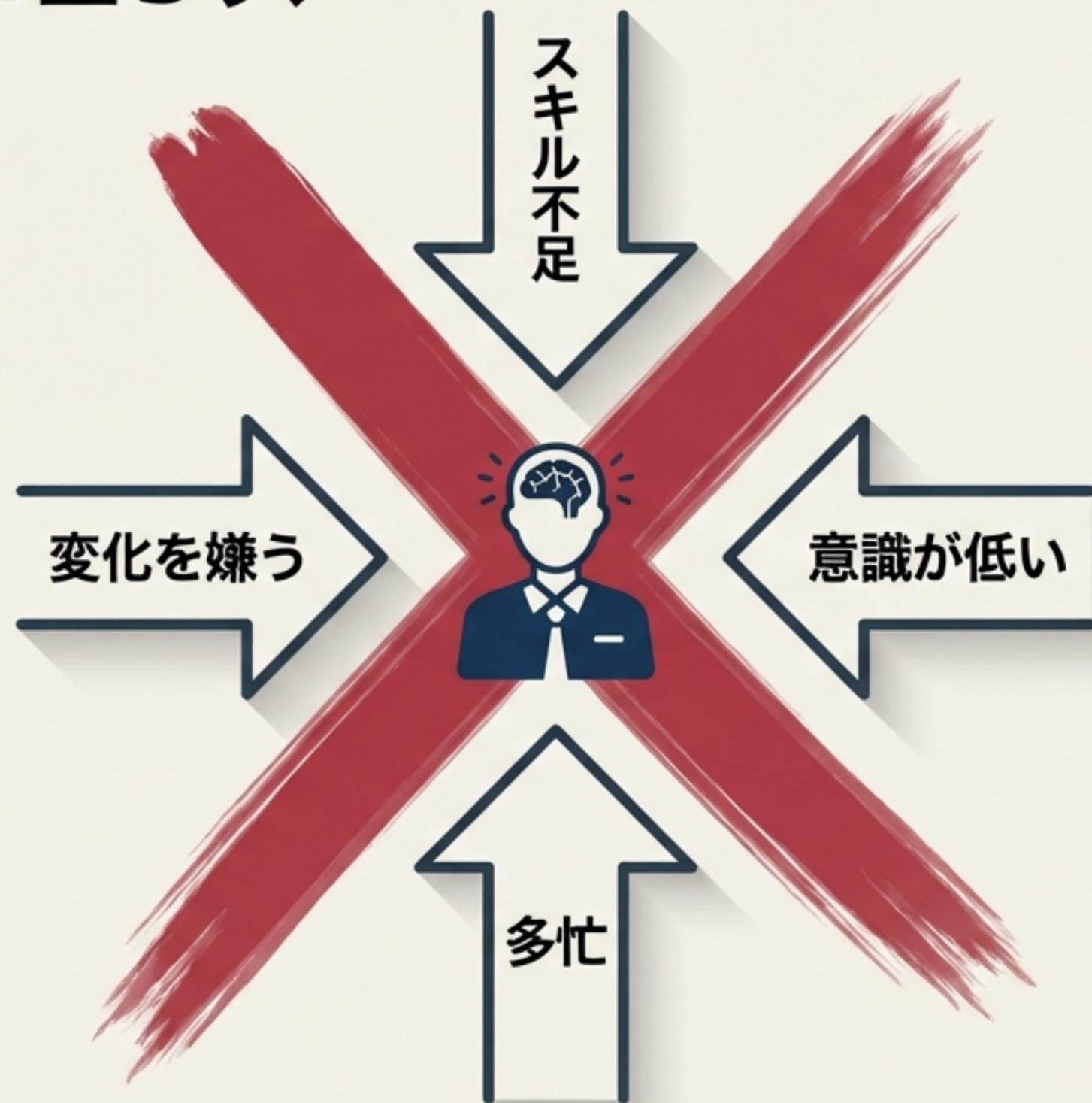
制度・現場・未来をつなぐ「学校DX戦略コーディネータ」論



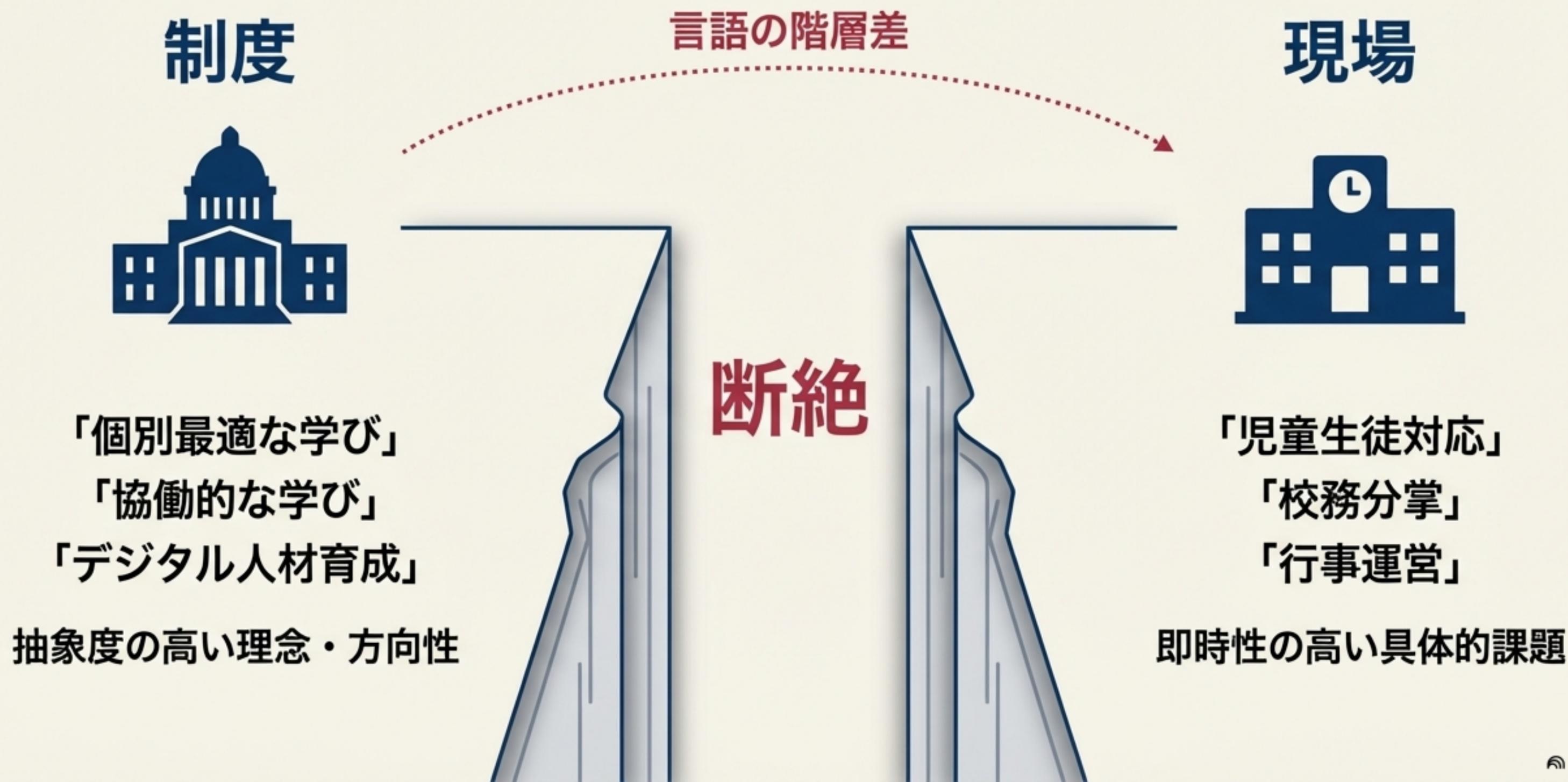
# なぜ学校DXは「学びの転換」に至らず、 停滞するのか？

- 一般的な説明：「教員のICTスキル不足」「教員の意識が低い」
- 本稿が提示する真因：これは「現場起因」の問題ではない。

問題の本質は、個人の資質ではなく、**構造的欠陥**にある。



# 真因：制度と現場を隔てる「翻訳者不在」という構造的欠陥



# 断絶を埋める唯一の存在：「学校DX戦略コーディネータ」

制度



現場



制度の「抽象理念」と現場の「具体課題」を往復し、両者を接続する専門職。

これは単なるICT推進担当ではない。

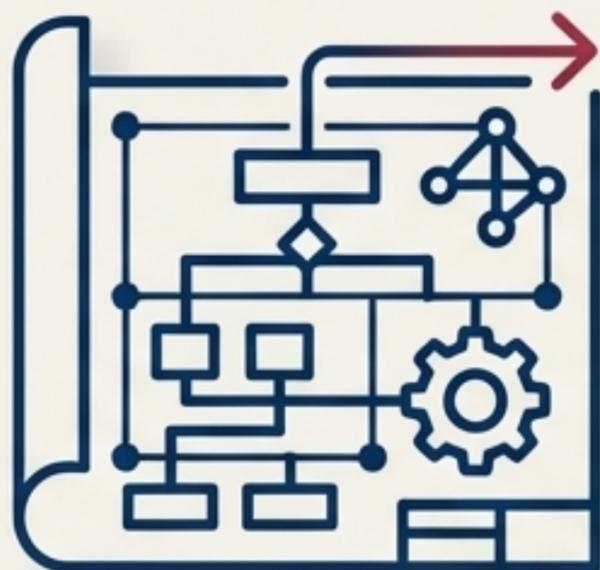
制度・現場・そして生徒の「未来」を接続する「**構造変革の担い手**」

# コーディネータが持つ3つの不可欠な機能



## 翻訳機能

抽象的な制度理念を、  
現場が判断できる  
「行動の言語」に変換する。



## 構造デザイン機能

学校文化というOSそのものを、  
未来型に再設計する。



## 未来基準の意思決定

「現在の都合」ではなく、  
「生徒の未来に必要なこと」を  
判断の起点とする。

## 機能1：理念を「行動」に変える翻訳の実践



**Result:** プログラミング研修と大学生メンターを組み合わせ、生徒が「大学で学ぶ自分」という未来像を描ける構造を設計。制度・現場・未来が初めて一体化。

## 機能2：学校文化というOSを書き換える構造デザイン

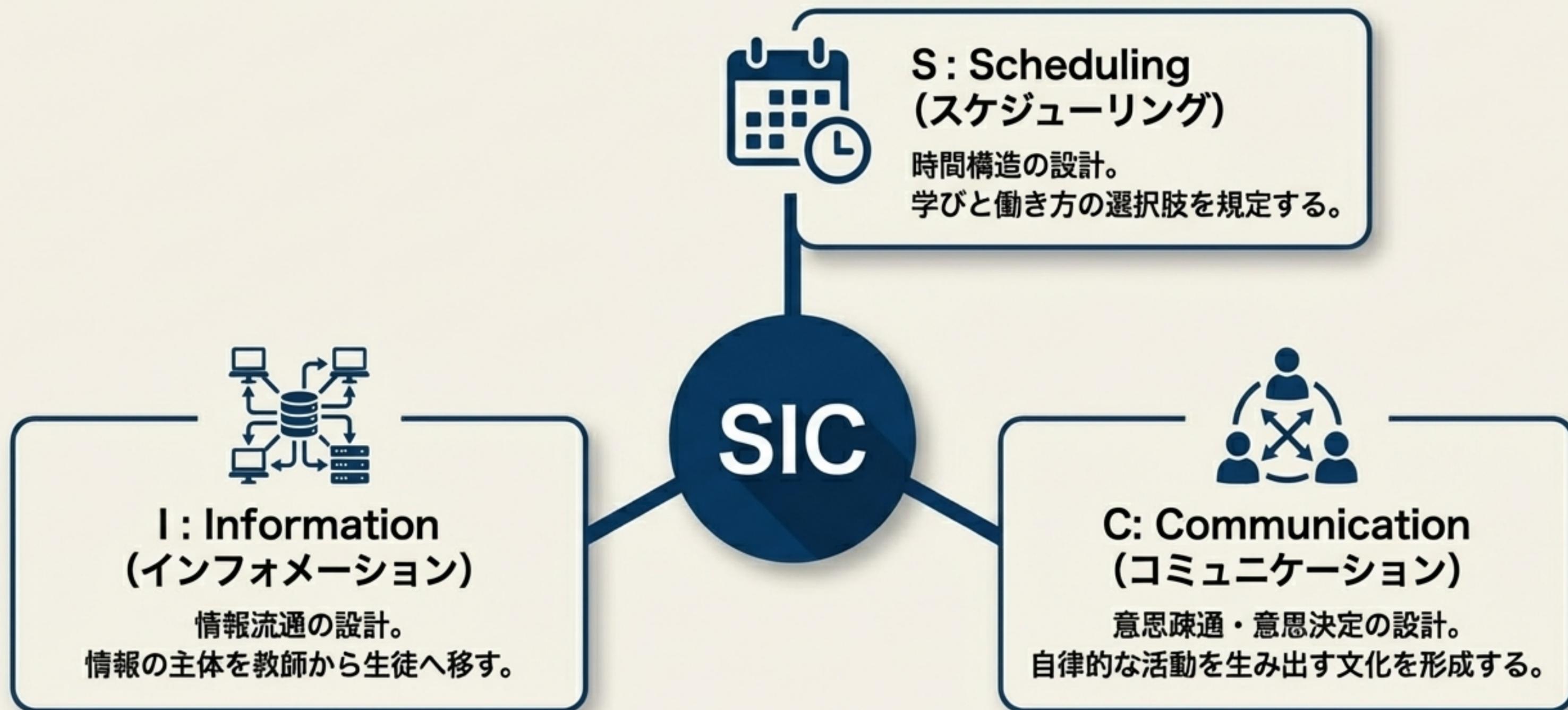
学校DXは、アプリ（施策）の追加ではない。OS（文化）の更新である。



古いOSの上では、どんな優れたアプリも正しく機能しない。

# 学校OSを再設計する共通言語 「SICフレームワーク」

縦割り構造の学校組織を横断し、管理者・教務・情報係、そして生徒が同じ構造図を共有するための「共通OS」。学校全体の意思決定基盤を再編する。



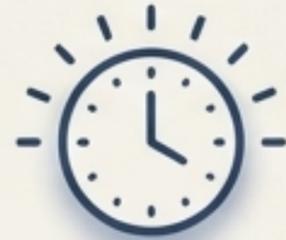
# 実践：SICによる学校文化OSのアップデート



## S (時間構造改革 - Time Structure Reform)



朝SHR

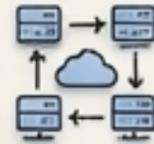


ウェルビーイング日課850

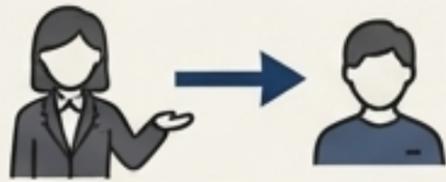
### ウェルビーイング日課850



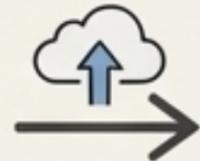
生徒と教員に「自己裁量時間」が生まれる。  
生徒は主体的な学習(進路学習、検定対策)を、  
教員は会議や個別支援の時間を確保。



## I (情報流通改革 - Information Flow Reform)



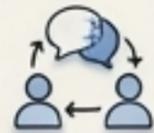
情報を受け取る文化



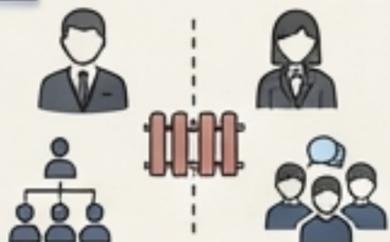
自ら情報を取りに行く文化

### 連絡事項を全てTeamsへ移行

連絡事項を全てTeamsへ移行。  
学びのOSを「受動」から「自走」へ更新。



## C (意思決定改革 - Decision-Making Reform)



分断された意思決定



共通言語での意思決定

### SICというでの意思決定



SICという共通言語を管理者・教員・生徒で共有。  
生徒が自己裁量時間を活用し、進路相談や部  
活動が能動的に行われる文化が形成される。



# 機能3：「生徒の未来」を起点とする意思決定

学校運営の判断基準を、「現在」から「未来」へシフトする。



「すべての意思決定は『未来を生きる生徒にとって正しいか』に統一されるべきである。」

# 実践：未来基準が生み出す「価値創造的学び」

## 単なる販売実習



教員が指導し、生徒は従う。



## 生徒が主体となり学校全体の構造を再設計するプロジェクトへ



生徒が主体となり学校全体の構造を再設計するプロジェクトへ。

### Key Shifts

- 👤 生徒 (Students): 自ら課題を発見し、改善策を立案。学びを「自分でつくるもの」と認識。
- 👤 教員 (Teachers): 「指導する側」から「支える側」へ役割を転換。

これこそが、制度（DXハイスクール事業） - 現場（Gデパート） - 未来（生徒の価値創造）が接続された状態である。

# 学校DXを成功に導く「構造変革モデル」の全体像



# 全国展開への示唆：DXの成否は「人」で決まる

全国の停滞事例の多くは、技術や予算の問題ではなく、抽象的な制度理念を現場文化へ翻訳する主体がないことに起因する。

## 全国展開に必要な3つの要件



1. 「翻訳者」の配置:  
学校に「翻訳者」を配置することがDXの前提である。



2. 「構造デザイン」の実装:  
学校文化のOS（情報・時間・意思決定）を書き換える構造デザインが必要である。



3. 「未来基準」への転換:  
未来基準の意思決定が、生徒主体の学びを生み出す唯一の出口である。

普及させるべきは、「技術」ではなく「構造をデザインできる人材」である。

# 学校DX戦略コーディネータ：未来を設計する構造変革の担い手

- 学校DXの本質は、ICT導入や業務効率化ではない。
- それは、制度と現場の断絶を埋め、学校文化のOSを更新し、生徒の未来から逆算して学びを設計する、終わりなきプロセスである。
- その中心に立つのが「学校DX戦略コーディネータ」だ。彼らは単なる推進役ではない。学校というシステムそのものを再設計する、未来へのアーキテクトである。

岐阜女子大学におけるコーディネータ養成は、この「**構造を扱える人材**」を各地域に生み出すための**重要な基盤**となる。

